

ロシア所蔵のウイグル文『入阿毘達磨論』注釋書斷片

庄垣内正弘

(The Uighur Version of Commentary of *Abhidharmāvatāra-śāstra* Preserved in Russia)

Masahiro SHŌGAITO

(pp. 91-128)

Contribution to the Studies for Eurasian Languages series vol.15

『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』

Native and Loan in Turkic Languages

九州大学人文科学研究院言語学研究室 Department of Linguistics, Graduate School of
Kyushu University／ユーラシア言語研究コンソーシアム The Consortium for Studies of
Eurasian Languages

2009 March

ISBN 978-4-903875-18-7

ロシア所蔵のウイグル文『入阿毘達磨論』注釋書斷片

庄垣内 正弘

(京都産業大學)

0. ウイグル文の『入阿毘達磨論』は發見されていない。しかしその注釋書斷片はストックホルム民族學博物館に 3 葉，羽田家所蔵ウイグル文獻寫眞に 4 葉が長らく知られていた。その後筆者はロシア科學アカデミー東洋文獻研究所に 6 斷片を見つけ，テキストを公表した。今回同研究所に保管された以下の斷片が『入阿毘達磨論』の注釋であることがわかった¹。

SI Kr. 1/25 SI Kr. 1/32

SI Kr. 1/26 SI Kr. 1/34

SI Kr. 1/31

この 5 點は先の 6 斷片(SI Kr. 1/24, 27, 28, 29, 30, 33)に先行する内容であつてもとは一卷子として作成された。いずれも漢文佛典の裏面を利用しているが，同一佛典ではない。先の 6 斷片の漢文面は『大智度論』である。これに對してここで扱う斷片は『妙法蓮華經』である。この二種の漢文佛典が張り合わされてその裏面にウイグル文を書いたものと推定できる。ここではこの『入阿毘達磨論』注釋書斷片の文獻學的分析とテキストの提出を目的とする。

1. 漢文面からのテキストの再構

ロシア所蔵ウイグル語斷片はセロハン紙に貼られて修復されている。しかし，修復はしばしば不完全で，誤りもある。そのことはウイグル語の内容からも判明することができるが，漢文の裏面を利用したものは漢

¹ Cf. この 6 斷片については，庄垣内([2008] pp. 135-154)を参照されたい。なお，この場を借りて SI Kr. 1/25, 26, 31, 32, 34 の掲載を許可してくださったロシア科學アカデミー東洋文獻研究所に感謝の意を表しておきたい。

文の内容から判断するのが簡便である。とりわけここで扱うような小断片かつ複雑な内容をもつウイグル文は漢文面の利用が効果的である。以下には漢文面の再構をととしてウイグル語面を再構してみたい。

亦見亦供養	亦令得歡喜	諸佛坐道場	所得祕要法	
能持是經者	不久亦當得	能持是經者	於諸法之義	
名字及言辭	樂說無窮盡	如風於空中	一切無障礙	
於如來滅後	知佛所說經	因緣及次第	隨義如實說	
如日月光明	能除諸幽冥	斯人行世間	能滅衆生闇	SI Kr. 1/32
教無量菩薩	畢竟住一乘	是故有智者	聞此功德利	
於我滅度後	應受持斯經	是人於佛道	決定無有疑	

妙法蓮華經囑累品第二十二

爾時釋迦牟尼佛從法座起現大神力以右手摩無量菩薩摩訶薩頂而作是言我於無量百千萬億阿僧祇劫修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付囑汝等汝等應當一心流布此法廣令增益如是三摩諸菩薩摩訶薩頂而作是言我於無量百千萬億阿僧祇劫修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法今以付囑汝等汝等當受持讀誦廣宣此法令一切衆生普得聞知所以者何如來有大慈悲無諸慳吝亦無所畏能與衆生佛之智慧如來智慧自然智慧如來是一切衆生之大施主汝等亦應隨學如來之法勿生慳吝於未來世若有善男子善女人信如來智慧者當爲演說此法華經使得聞知爲令其人得佛慧故若有衆生不信受者當於如來餘深法中示教利喜汝等若能如是則爲已報諸佛之恩時諸菩薩摩訶薩聞佛作是說皆大歡喜遍滿其身益加恭敬曲躬低頭合掌向佛發聲言如世尊敕當具奉行唯然世尊願不有慮諸菩薩摩訶薩衆如是三反發聲言如世尊敕當具奉行唯然世尊願不有慮爾時釋迦牟尼佛令十方來諸分

身佛各還本土而作是言諸佛各隨所安多
寶佛塔還可如故說是語時十方無量分身
諸佛坐寶樹下師子座上者及多寶佛并上
行等無邊阿僧祇菩薩大衆舍利弗等聲聞
四衆及一切世間天人阿修羅等聞佛所說
皆大歡喜

SI Kr. 1/31a

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三
爾時宿王華菩薩白佛言世尊藥王菩薩云
何遊於娑婆世界世尊是藥王菩薩有若干
百千萬億那由他難行苦行善哉世尊願少
解說諸天龍神夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅
緊那羅摩侯羅伽人非人等又他國土諸來
菩薩及此聲聞衆聞皆歡喜爾時佛告宿王
華菩薩乃往過去無量恆河沙劫有佛號日
月淨明德如來應供正遍知明行足善逝世

SI Kr.1/26

間解無上士調御丈夫天人師佛世尊其佛
有八十億大菩薩摩訶薩七十二億河沙大
聲聞衆佛壽四萬二千劫菩薩壽命亦等彼
國無有女人地獄餓鬼畜生阿修羅等及以
諸難地平如掌琉璃所成寶樹莊嚴寶帳覆
上垂寶華幡寶瓶香爐周遍國界七寶爲臺
一樹一臺其樹去臺盡一箭道此諸寶樹皆
有菩薩聲聞而坐其下諸寶臺上各有百億
諸天作天伎樂歌歎於佛以爲供養爾時彼
佛爲一切衆生意見菩薩及衆菩薩諸聲聞
衆說法華經是一切衆生意見菩薩樂習苦
行於日月淨明德佛法中精進經行一心求
佛滿萬二千歲已得現一切色身三昧得此
三昧已心大歡喜即作念言我得現一切色
身三昧皆是得聞法華經力我今當供養日
月淨明德佛及法華經即時入是三昧於虛
空中雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華細末堅黑
栴雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華細末堅黑栴
檀滿虛空中如雲而下又雨海此岸栴檀

SI Kr.1/25a SI Kr. 1/31b

SI Kr. 1/34

^^^
vvv

所有舍利亦付囑汝當令流布廣設供養應
起若干千塔如是日月淨明德佛敕一切衆
生意見菩薩已於夜後分入於涅槃爾時一
切衆生意見菩薩見佛滅度悲感懊惱戀慕
於佛即以海此岸梅檀爲積供養佛身而以
燒之火滅已後收取舍利作八萬四千寶瓶
以起八萬四千塔高三世界表剎莊嚴疊
幡蓋懸衆寶鈴爾時一切衆生意見菩薩
自念言我雖作是供養心猶未足我今當更
供養舍利便語諸菩薩大弟子及天龍夜叉
等一切大衆汝等當一心念我今供養日月
淨明德佛舍利作是語已即於八萬四千塔
前燃百福莊嚴臂七萬二千歲而以供養令

81 Kr. 1/26b

(大正大藏經 vol. 9『妙法蓮華經』 p.52b.//18-c23)

上記の圖から判断できるように東洋文獻研究所で一續きの 1 断片とされた SI Kr. 1/25 は實は別々の 2 つの断片から構成されている。また、SI Kr. 1/31 も 2 断片に分割でき、小さい方の断片は SI Kr. 25 と SI Kr. 26 に接續するものであった。この再構された漢文を裏返せばウイグル面が再構されることになる。

先の 6 断片(SI Kr. 1/24, 27, 28, 29, 30, 33)は別の漢文佛典すなわち『大智度論』の裏面に書かれているので漢文面からここで扱う断片との位置関係は判らないが、ウイグル文に引用された『入阿毘達磨論』から推してここに扱う断片より後の内容を保っている。

ここで扱う断片のサイズは以下のとおりである：²

SI Kr. 1/25a 5.5cm × 21cm

SI Kr. 31a 26cm × 12.5cm

² SI Kr. 1/25 と SI Kr. 1/31 の番号をここで便宜的に a と b とに分割した。掲載写真もそのように修正して掲げた。

SI Kr. 1/25b	10cm × 10cm	SI Kr. 31b	2.5cm × 5.5cm
SI Kr. 26	4cm × 12.5cm	SI Kr. 32	22cm × 11cm
		SI Kr. 34	20cm × 12cm

2. ウイグル文テキスト

2.1. 内容

内容は『入阿毘達磨論』の語句を引用しそれを注釋したものと推定できる。缺損の度合いが大きいので漢文との對應部分を見つけるのは容易ではない。注釋文には『俱舍論頌疏論本』と對應する内容がかなり現れる。ウイグル文は構文が漢文構文に似るところが有る點や、漢字音寫語彙の現れることから、漢文を翻譯原典としたことは間違いない。『入阿毘達磨論』からの引用は大正大藏經第 28 卷の 985 ページ上段 21 行目から始まり 986 ページ中段の 25 行目に終わっている。ちなみに先述の 6 斷片は 987 ページ中段 22 行目から開始される。

以下にウイグル文中の『入阿毘達磨論』からの引用箇所を掲げたい。ただしウイグル文は小斷片に書かれているので、ここでは斷片の中に確認できる語句のみに下線を施して引用箇所とした：

- p. 985a l. 21 前說諸界諸趣。諸生諸地。受苦應說。云何界趣生。地界有三種。謂欲界 色界無色界。欲界有二十處。謂八大地獄。一等活。二黑繩。三衆合四號叫五大號叫。六炎熱七極炎熱。八無間。并傍生鬼界爲十。有四洲人一瞻部洲。二勝身洲。三牛貨洲。四俱盧洲。有六欲天。一四大王衆天。二三十三天。三夜摩天。四覩史多天五樂變化天。六他化自在天。合二十處。色界有十六處。謂初靜慮有二處。一梵衆天。二梵輔天。第二靜慮有三天。一少光天。二無量光天。三極光淨天。第三靜慮有三天。一少淨天。二無量淨天。三遍淨天。第四靜慮有八天。一無雲天。二福生天。三廣果天。四無煩天。五無熱天。六善現天。七善見天。八色究竟天。合十六處。大梵無想無別處所故非十八。
- p. 985b l. 1

- 無色界雖無上下處所。而有四種生處差別。
 一空無邊處。二智無邊處。三無所有處。四非
 想非非想處。趣有五種。一奈洛迦。二傍生。
 三鬼界。四天。五人。生有四種。謂卵胎濕化。
 地有十一。謂欲界未至靜慮中間四靜慮四
 p. 985b l. 10 無色爲十一地。欲界有頂一向有漏。餘九地
 通有漏及無漏前。界趣生一向有漏。
 智有十種。謂法智。類智。世俗智。他心智。苦
 智。集智。滅智。道智。盡智。無生智。於欲界諸
 行及彼因滅加行無間解脫勝進道。并法智
 地中所有無漏智名法智。無始時來常懷我
執。今創見法故名法智。於色無色界諸行及
 彼因滅加行無間解脫勝進道。并類智地中
 所有無漏智名類智。隨法智生故名類智。諸
 有漏慧名世俗智。此智多於瓶衣等世俗事
 p. 985b l. 20 轉故。名世俗智。此有二種。一染污。二不染
 污。染污者復有二種。一見性。二非見性。見性
有五。謂有身見。邊執見。邪見。見取。戒禁取。
 非見者。謂疑貪瞋慢無明忿害等相應慧。不
 染污者。亦有二種。一善。二無覆無記。無覆無
 記者。非見不推度故。是慧及智。善者若五智
俱。亦非見是慧及智。若意智俱。是世俗正見
 亦慧亦智。諸定生智能了知他欲色界繫。一
 分無漏現在相似心心所法名他心智。此有
 二種。一有漏。二無漏。有漏者。能了知他欲色
 p. 985c l. 1 界繫心心所法。無漏者有二種。一法智品。二
 類智品。法智品者。知法智品心心所法。類智
 品者。知類智品心心所法。此智不知色無爲
 心不相應行。及過去未來無色界繫。一切根
 地補特伽羅勝心心所皆不能知。於五取蘊
果分有無漏智。作非常苦空非我行相轉名
苦智。於五取蘊因分有無漏智。作因集生緣
 行相轉名集智。於彼滅有無漏智。作滅靜妙
 離行相轉名滅智。於彼對治得涅槃道有無漏
 p. 985c l. 10 智。作道如行出行相轉名道智。有無漏智作

- 是思惟。苦我已知。集我已斷。滅我已證。道我已修。盡行相轉名盡智。有無漏智作是思惟。苦我已知不復更知。乃至道我已修不復更修。無生行相轉名無生智。此後二智不推度故非見性。他心智唯見性。餘六智通見性非見性。世俗智唯有漏。他心智通有漏及無漏。餘八智唯無漏。滅智唯無爲緣。他心苦集道智唯有爲緣。餘五智通有爲無爲緣。苦集智唯有漏緣。滅道智唯無漏緣。餘六智通有漏無漏緣。法智在六地。謂四靜慮未至中間。類智在九地。謂前六地下三無色。他心智在四地。謂四靜慮。世俗智在一切地。餘六智法智品者在六地。類智品者在九地。
- p. 985c l. 20 忍有八種。謂苦集滅道。法智忍及苦集滅道類智忍。此八是能引決定智勝慧。忍可苦等四聖諦理。故名爲忍。於諸忍中此八唯是觀察法忍。是見及慧非智自性。決定義是智義。此八推度意樂未息。未能審決故不名智。苦法智忍與欲界見苦所斷十隨眠得俱滅。
- p. 986a l. 1 苦法智與彼斷得俱生。忍爲無間道。智爲解脫道。對治欲界見苦所斷十種隨眠。如有二人。一在舍內驅賊令出。一關閉門不令復入。

^^^
vvv

- 引前得。三者如犢子隨後得。初得多分如無覆無記法。第二得多分如上地沒生欲界結生時欲界善法得。第三得多分如聞思所成慧等。除俱生所餘得。此中應作略毘婆娑。謂欲界繫善不善色無前生得。但有俱生及隨後得。除眼耳通慧及能變化心。并除少分。若威儀路若工巧處極數習者。諸餘一切無覆無記法。及有覆無記表色。唯有俱生得。勢力劣故無前後得。所餘諸法一一容有前
- p. 986b l. 21

後俱得。善法得唯善。不善法得唯不善。無
記法得唯無記。欲界法得唯欲界。色界法

(大正大藏經 vol. 28 『入阿毘達磨論』下)

2.2. ウイグル語の特徴

ウイグル文は草書體ウイグル文字で、かつ読みづらい筆跡である。譯語は、ウイグル文アビダルマ論書の代表文獻である『阿毘達磨俱舍論實義疏』のものと共通する。しかし、『實義疏』では見られない漢語音寫語彙の使用法がある：

[] t' xui bilig ċi bilig öz töz-lüg ärmäz (SI Kr.1/34 l. 40)

「(これは見および) 慧 (であって)、智の自性もてるものではない」

このウイグル文は次の漢文と對應する：是見及慧非智自性 (p. 985c l. 27) 「これは見および慧であって智の自性ではない」。

「慧」は xui bilig, 「智」は ċi bilig と表現されている。xui (kwy) は慧 (中古漢語 *fiuei*), ċi (cy) は智 (中古漢語 *tiě*) のウイグル漢字音による音寫形式である。bilig は「智慧」「識」を表現できるがこのテキストでは前者に用いられている。ここでは「慧 bilig」で「慧」を「智 bilig」で「智」を表現している。このような表現法は『實義疏』などにはみられない。次の例ではウイグル語の on 「十」の代わりにそのウイグル漢字音形式 šib (syb 中古漢語音 *ziap*) を使用している：³

[] 'wq : šib bilig-ning ärmäz-in yertinčülüg-tä on (SI Kr.1/34 l. 45)

「・・十智のものでないことを世間に十」

また、上の xui bilig ċi bilig に使われる bilig は『實義疏』では確實に「識」の譯語にあてられ、「智」「智慧」「慧」には bilgä bilig が用いられる。しかし、このテキストでは bilig は「智」にあてられており、bilgä bilig あ

3 ウイグル漢字音については庄垣内[2003] pp.1-136) を参照されたい。

るいは漢字音寫形 *ei* との區別も判然としないところがある⁴。

佛教用語として次のようなサンスクリットが登場するが、語末のサンスクリットの語末の *-a* がウイグル語では脱落している。これはトカラ語経由のウイグル語が無生物表示語のサンスクリット *-a* を脱落させる規則と一致している⁵。

- 十六天 : adap < Skt. atapa 「無熱天」
 abrax < abṛha 「無煩天」
 braxmakik < Skt. brahmakāyika 「梵衆天」
 braxma-purixit < Skt. brahmapurohita 「梵輔天」
 brxatmal < Skt. bṛhatphala 「廣果天」
 paridap < Skt. parītābha 「少光天」
 punyaprasau < Skt. puṇyaprasava 「福生天」
 sudraṣ[an] < Skt. sudraśna 「善見天」
 sudrṣ < Skt. sudṛśa 「善現天」

4 bilig の使用分布をみると以下のごとくである :

bilig 「智」 31a-15, 22, 24, 26, 33, 25a-6, 34-9, 11, 14, 39, 41

bilig bölük 「智品」 25a-8, 34-8

yılayu bilig 「世俗智」 31a-26, 27, 53, 34-20. Cf. yılayu bilgä bilig Tattv. p. 522a.

bilig taplay 「智忍」 34-30, 39

bilgä bilig 「智」 31a-17, 41, 34-25, 33

nom bilgä bilig 「法智」 31a-7, 23, 45

kertü bilgä bilig 「諦智」 34-16

bilgä bilig-siz 「無智」 31a-29

ämgäk bilgä bilig 「苦智」 25a-10

öčmäk bilgä bilig 「滅智」 34-18

aqṛysiz bilgä bilig 「無漏智」 25a-13 ~ aqṛysiz bilig- 34-37. Cf. aqṛysiz bilgä bilig 「無漏慧」 (Tattv. p. 522a).

ämgäktä nom bilgä bilig taplay 「苦法智忍」 34-32 = Tatt. (cf. p.651).

5 ウイグル語中のサンスクリット語末形式と仲介言語との関係については庄垣内[1978]を参照されたい。

地獄名 : kadasudur < Skt. kālasūtra 「黒繩」⁶

sangat < Skt. saṃghāta 「衆合」

四洲名 : udarkavrap < Skt. uttara-kaurava 「北俱盧洲 (人)」⁷

2.3. 轉寫と翻譯

轉寫テキストは斷片を再構した形式で提出する。轉寫テキストの下部に和譯を施すが、缺落部分が大きいので内容把握は十分には行えない。文字 t と d とは音素 /t/d/ を表すのに混用されている。使用文字を重視して文字轉寫のまま提示したい。

SI Kr.1/32

- 1)]l[]m[]d'n ymä[
- 2)] uyuš tep: [
- 3) a]z-qa qošdači az-niŋ tatyanıyuluq yap[šınyuluq⁸
 ・ ・ 食に繋するものは、食 (に) 味著するところの ・ ・
- 4)]' adın ärtmiš kälmatük ödki-sintä (üz-ä) ärmäz[
 ・ ・ 餘の過去・未來世において、・ ・ 非ず⁹ ・ ・
- 5)] kntü söz-lär : tamu kadasudur : sangat birlä yä[nä
 ・ ・ (經に) 自ら説く : 地獄, 黒繩, 衆合, 並びに⁹ ・ ・

6 サンスクリットの l がウイグル語で d/t で反映される例は他にもある : Skt. upakāla : Uig. upakati, Skt. mahakāla : Uig. maxakadi (庄垣内[1978] p. 102). この対応もトカラ語の反映と推定できる : cf. Skt. kālika : Toch. kādike (Adams [1999] p.150).

7 トカラ語も Skt. -va を -p とする例がある : *āsrāp < Skt. āśrava Poucha[1955] p.30.

8 tatyanıyuluq yap[šınyuluq] = 「味著」(「沈溺すること」中村 p.1579b)。

9 ここでは八大地獄を並べている : 等活 (saṃjīva), 黒繩 (kāla-sūtra), 衆合 (saṃghāta), 號叫 (raurava), 大號叫 (mahā-raurava), 炎熱 (tapana), 極炎熱 (pratāpano), 無間 (avīci)。

- 6) d]vip udarkavrap : bar ärür altı qat amranmaq t[ngirilär yegirmi]
 ・ ・ (牛貨洲), 俱盧洲¹⁰ 六層の欲の天¹¹ が有る ・ ・ (合して)
- 7) o]run-lar : ulug tegüçi sav üz-ä adırur [pret-ig ulatı yılqı-y
 ・ ・ 二十處。「大」という言葉によって餓鬼及び傍生を區別する¹² ・
- 8)]lyq : bölinti yerindi (ymä ter) tamu-lar-nıng sanı-nın[g
 ・ ・ (分裂した, ともいう。) 地獄の数の ・ ・
- 9)]bu säkiz-ägüni : pret ulatı yılqı-nıng yö[rüg
 ・ ・ この八つを¹³。餓鬼及び傍生の義 ・ ・
- 10)] yänä tep : tägimlig ärdi söz-lägäli ulu[γ dvip
 ・ ・ またと。應に大(洲)¹⁴ ・ ・ と説くべきであった。 ・ ・
- 11)] yüz: -nıng dvip-ları anga terin quvray bol[¹⁵
 ・ ・ {百} ・ ・ の州がそこへ集合をなし ・ ・
- 12)] tngri [ula]tı yertinçü-däki uluy elig äv[
 ・ ・ {天} および世界にある大國家 ・ ・

10 ここでは四洲を並べている: 瞻部洲(jambu-dvīpa), 東勝身洲(pūrva-videha), 西牛貨洲(apara-godānīya), 北俱盧洲(uttara-kuru)。Uig. udarkavrap は Skt. uttara-kaurava 「北俱盧洲(人)」(cf. 平川[1973] p. 95) の反映形である。5 行目の tamu 「地獄」には本来は「等活地獄」が立つところである。

11 「六層の欲の天」= 「六欲天」: 大王衆天, 三十三天, 夜摩天, 覩史多天, 樂變化天, 他化自在天。

12 「合して二十處」とは「八大地獄と傍生・鬼界」「四洲」「六欲天」を指す。「大」という言葉によって餓鬼及び傍生を區別する」とは「八大地獄」と「餓鬼・傍生」を區別することを云う。

13 「この八つ」とは「八大地獄」のことを云う。

14 「大洲」= 「四大洲」。

15 11 行目～14 行目の斜体字にした先頭部分は後続部分と内容が繋がらない。おそらく修復に際して別の断片を貼り合わせたものであろう。裏の漢文面はちょうど空白部分なので本来の位置は不明である。

- 13) *iki*] *läyü tng*[*ri*] bu oq inčip ärür ü[č] uguš-t[*a*
 ・ ・ {さらに天} これは即ち三界において ・ ・ である。 ・ ・
- 14) *yu*] *layu-sin* '[] 'l'ryn ärmäz bu yänä iki []
 ・ ・ {世俗を?} ・ ・ ・ ではない。これはまた二 ・ ・
- 15) [] *anin* bar qılmış ol altı qat amranma[q tngri
 ・ ・ {それ故,} 六層の欲 (の天) を有したのである。 ・ ・
- 16) [] *tamu tep* bu oq inčip ärür amranıyuluq s[]
 ・ ・ 地獄と。これはすなわち所欲の ・ ・ である。
- 17) [r andaqı alqu tınly-lar näčä tägsär-lär ym[ä]
 ・ ・ そこに居る諸の衆生は如何に (種種斫刺磨擣を) 受けても ・ ・ ¹⁶
- 18) ['] *ter ögsiräp tinsirap yer-tä qamıl*[ıp
 ・ ・ という。人事不省になって地に倒れて ・ ・
- 19) *so*] *γiq äsin-lär tüz tun tiri*(l) *ingl*[är]¹⁷
 ・ ・ 涼風が起こり, (汝らは) 等しく穏やかに生きよ! ・ ・
- 20) [wr-l'r üçün aš-nuča tana yip üz-ä tanal[amış

16 ここから 24 行目辺りまでは『阿毘達磨順正理論』(vol.29 p.516b)『俱舍論記』(vol. 41 p.148b)『俱舍論頌疏論本』の内容と類似する。以下に『俱舍論頌疏論本』の内容を掲げる:

有八。名地獄異。一等活地獄。謂彼有情。雖遭種種斫刺磨擣。而彼暫遇涼風所吹。尋蘇如本。等前活故。立等活名。二黑繩地獄。先以黑繩。秤量支體。後方斬鋸。故名黑繩。三衆合地獄。衆多苦具。俱來逼身。合黨相殘。故名衆合。四號叫地獄。衆苦所逼。異類悲號。發怨叫聲。名為號叫。五大號叫地獄。劇苦所逼。發大哭聲。悲叫稱怨故。名為大號叫。六炎熱地獄。火隨身轉。炎熾周圍。熱苦難任故名炎熱。(vol. 41 p. 863b l. 15 ~ 24)。

17 *tiri*(l)*ingl*[är] は *tyry'nkl* と綴られているが、注 16 に掲げた「尋蘇如本。等前活故」(『俱舍論頌疏論本』)を考慮して文字 ' は文字 l の誤写と考えて *tirilinglär* 「汝ら生きよ」と読んだ。

・ 故に先ず墨繩を以て墨を引いた ・ ・

- 21) yerär üçün ymä ter : üküš-in tälimin [
 (裂ける故, ともいう。) 多数で ・ ・
- 22) tešür üçün qamıy ämgäk-lär üz-ä sıqıtılur wl[
 と言ひ合う故に, 衆苦によって壓迫される。 ・ ・
- 23) l'r üz-ä artuqraq : qadnayu artuqraq erinčkänčig
 ・ によって究極の重ねて究極の悲哀 (の叫び) ・ ・
- 24) ödä topulu turur töruglög yalın-lar qurş[at-
 突いている。 ・ ・ 炎は取り囲み ・ ・
- 25) anınga tavraq-lıyın täğintür-lär üçün yti açi[γ öngi]
 それへ速やかにかれらは至る故, 鋭利な (根) ・ ・
- 26) b]ışmaq töz-lüg mängi uyri yiqi bolur sysdw¹⁸ [
 異熟性もてる樂は, 等流の (樂を有す) 容きこととなる。 ・ ・
- 27) tamu-ta bir yindäm bolmaz mängi oqsuz ämgäk-lig [
 地獄において唯々樂とならず無間の苦 (を受ける) ・ ・
- 28) suv]samaq üz-ä ägsüp içgü krgäk-lädäči-lär (küšädäčilär) üçün [čambu
 渴乏して飲むことを欲するものらの爲に ・ ・ 膽部洲の
- 29) dv]ip divipı-nıng adın adamış ol : ät'öz-läri ye[g
 洲名を付けた。身が勝る (故, 勝身洲の名を付けた) ・ ・

18 sysdw は「等流」に該当するが來源は不明である。同じ形式は Tattv. p. 452 l. 4360 にも現れる。この 26 ~ 27 行目の内容に類似するものが『阿毘達磨順正論』にある：唯此洲人。極利根故。以無樂間。立無間名。所餘地獄中。雖無異熟樂。而無太過失。有等流樂故。有說。無隙。立無間名。雖有情少。而身大故。有情其中受苦無間。(vol. 29 p. 516a l. 29 ~ b4)。

- 30) tavar]ıy sadtaçı tığşürdäçi-lär üčün satmaq üz-ä y[
 (牛でもって) 交易するものら故に, 賣ることによって・・(牛貨洲
 の名を付けた)・・
- 31)]d'cy igsirtäçi-lär üčün[]m"d[
 ・ 病の無いものらの故に・・(俱盧洲の名を付けた)・・¹⁹
- 32)]'lwy'pwz-yn tört[
 ・ 四・・
- 33)]qamıyı üč qı[rq tngirilär
 ・ (四大王) 衆, 三十三天・・
- 34)]"rk'sm'klyk atsız(?)[
- 35) t'dyn tuž-it tngri y[
 ・ 觀史多天²⁰・・
- 36) üčün ärksinmäk-in adın-l[arnıng
 故, 自在に他らの(天の化作した)・・他(化自在天と名付けた)・・²¹
- 37) üčün qayu tınlı uyışı bolsar yerindin
 故に若し有生界なら地から・・
- 38) amranmaq uyış-ta oq tutulur amranmaq-ları arduq[raq
 欲界において攝される欲は極めて・・

19 「俱盧洲」に病の無いことは『佛說較量壽命經』にも書かれている：北俱盧洲人 世間最快樂 過去修施因 劫樹妙衣果 彼無寒熱苦 亦無諸煩惱 色相妙端嚴 過去因修施 福勝難破壞 粳米自然生 清淨色純白 過去因修施 (大正 vol. 17 p. 759 ll. 22-26)

20 tužit < Skt. tuṣita 「觀史多天」(都率天)

21 Cf. 處樂數化欲境。於中受樂。六他化自在天。謂彼天處於他所化欲境自在受樂。(『俱舍論記』 大正 vol. 41 p.148b ll. 9-10)

- 39) braxmakik braxma-purixit tngri yeri ärtür : paridap [
梵衆天, 梵輔天の地である。少光天・・
- 40) punyaprasau brxatmal : abrax adap sudrş sudraş[an
福生天, 廣果天, 無煩天, 無熱天, 善現天, 善見天・・
- 41) ärmäz üçün säkiz ygrmi bolur ärmäz : bolmamış ol ö[ngsüz uyuş[
でない故に²², 十八となることはない。無色界・・
- 42) tuγum üz-äki dyan orun ymä öngin u[γu]r-nu[ng
(四種の) 生にある禪定地もまた別の門の・・
- 43) üçün swtr'v'm-lar ymä keng ädgülüg-lär-ning t[uγγuluq
 故に・・らもまた廣い善もてるものらの生まれるところ・・
- 44) iyin (-qa sanlıy) quvrag üçün : äz-rua-tün bolmış ymä [²³
 に属する衆故に, 梵天からなった・・
- 45) taqı yaruq-ınta ät'öz-täki yaruqı qamıy-ta az ü[çün
 (二禪)にある光明において身にある明は最少故に(「少光天」と名
 づけた)・・
- 46) köngül orun-taqı mängi täginmäk-ning adı bolur[
 意處にある樂受の名は(意地樂受)となる・・
- 47) mängi : munung üstünki yer-lärintä yoq qamıy-lar[
 樂。これの上地には衆ら・・無い・・

22 これに対応する漢文は「大梵無想無別處所故」『入阿毘達磨論』 p. 985b l. 4) である。

23 iyin には削除記号が施されている。iyin の代わりに -qa sanlıy 「に属する」が傍注されている。

- 7 7)]wqwr-larġy qġldaċġ nom bilgä
 ・ ・ を爲す法智
- 8 8) [bilig] ärsär : orun-taqġ : orun-ġndaqġ
 ・ ・ は地にある，その地にある
- 9 9)]larġy: bilig-lär anġn söz-lämiš
 ・ ・ 智，それ故に説いた：
- 10 10)]yk-lär barċa atqanmaz-larmu nomuy
 ・ ・ かれらはすべて法を縁じないのか？
- 11 11) başlaysġz öd]-tin bärü u[za]dġ öridip mn
 ・ ・ 無始時來常に我執を起こして
- 12 12) [atqay]wz öngtünki sez-ig-kä kntü
 ・ ・ 先にある次第へ自ら
- 13 13) bil]mädin uqmadġn yindäm nom
 ・ ・ 了知せず唯，法
- 14 14)]maq yoq ärmiš mn tep körüm
 ・ ・ われは無かったと。見
- 15 15)] bu bilgä bilig angbašlayu²⁴
 ・ ・ この智を最初に（置いた）
- 16 16)]mäkin tägir arturmaq yollar-taqġ
 ・ ・ へを受ける。企畫された道にある

24 bu bilgä bilig 「この智」というのは nom bilgä bilig 「法智」を指す。

- 17 17) arıysız-ta]qı bilgä bilig tep : bilig
 ・ ・ (無漏) にある智 ・ ・ と。智
- 18 18)] uqıtur yörüntäk boldaçı öz
 ・ ・ 顯す，對治となる自身
- 19 19)]lwklwk bilig-lär yörüntäk
 ・ ・ 智，對治
- 20 20)]mayu yöründäk bolur üç uyuş-lar
 ・ ・ 對治となる。三界
- 21 21)]z : bu orun-ta ymä ök tägimlig ärti
 ・ ・ この地においても ・ ・ 應に
- 22 22)]wmqw toquz orun-luy üçün bilig tesär
 ・ ・ 九法もてる故に智というなら
- 23 23)]üçün otyurq nom bilgä bilig-tä
 ・ ・ 故に，定んで法智に
- 24 24)]m'd'çy-syn bu basa boldaçı bilig üçün
 ・ ・ この次となる智故 (類智と名づける)
- 25 25)]uyuş-uy adqanmaq: üstün uyuşuy
 ・ ・ 界を縁すること。上の界
- 26 26)] adı bolur : yılayu bilig bu bilig üküş-inčä
 ・ ・ その名は世俗智となる。この智は多いので
- 27 27) bol]mıš ol yılayu : bilig-lär temiš ärsär adırur aqıy
 ・ ・ となった。世俗智といったのは無漏 (の慧) を差別する。

- 28 28) [-süz bilgä bilig]uqıtur : yarım-ça cınlayu-ta ymä bolur-ın
 ・ ・ 顯わす。少分としては眞實においても ・ ・ なるのを
- 29 29)]l'm'k ärür bilgä biligsiz tep yörüg ol arduq
 ・ ・ は無智という義である。大いに
- 30 30)] 'wsyn oxšadı-sın anın basa ky"wt ty[]
 ・ ・ 同類を ・ ・ それで次に染汚 (?) と (?)
- 31 31)]täki bolur beš : qınanmaq ärür : ärmäz-i ärsär : biligk[ä
 ・ ・ 五となる。 ・ ・ 責めの是非は智に ・ ・
- 32 32)] ärür : ädgü örtügsüz yal(ı)γ-sız [
 ・ ・ (不染汚は) 善，無覆無記である。 ・ ・
- 33 33)]ädgü-tä (-sintä) qayu beš bilig-lär birläki-si ärsär[
 ・ ・ 善において若し五智と俱なるものは ・
- 34 34) yılayu] köni körüm ärür : kirlig tep temiş ärsär ol niz-vani
 ・ ・ 世俗の正見は染汚であると云ったのは，その煩惱
- 35 35) körüm t]öz-lüg temiş ärsär körüm bolur üçün töz-i isdätäçi
 ・ ・ 見性もてると云ったのは，見がその性となる故。求めるもの
- 36 36)]birlä yaratılmış töz-lügi ärsär öngtün söz-lämiş
 ・ ・ (非見?) と相應した性は先に説いた
- 37 37)] ädgülämiş-lig(?) köngül-nüng tw'[] ärür : syz temiş
 ・ ・ 善と化した(?)意の ・ ・ は ・ ・ と云った
- 38 38) amra]yuluq sävgülük temäk-tä ulatı köni körüm-lär ärür
 ・ ・ 所愛ということ等の正見である

- 39 39) kir] siz birlä yaratılmıŝı bolur beŝ : saqıŝ-ta ulatı 'w[]
 ・ ・ 不染汚と相應したものは五となる。數など
- 40 40)]wr : ädgü beŝ bilig-lär birlä : ygrmi tört türlüg
 ・ ・ 善の五智と二十四種(?) の
- 41 41) bi]lgä bilig-lär ärsär bilgäli uqyalı udaçı "[
 ・ ・ (諸定より生ずる) 智は ・ ・ を知覺できるもの
- 42 42) aqıys]ız közünür ödki oxŝatı köngül köngül-täki nom [
 ・ ・ 無漏の現在相似の心心所法 (を)
- 43 43)]ter : sav üz-ä adırur tıyım üz-ä bolmıŝ-ıy [
 ・ ・ と云う言によって、生において成じたものを差別する ・ ・
- 44 44)]tegüçi sav üz-ä : kntü öz-in uyus ların
 ・ ・ という言によって、自身で界を
- 45 45)] qaltı nom bilgä bilig bölüglüg
 ・ ・ 猶法智品
- 46 46)]üm-lüg köngül-kä basaqı bir
 ・ ・ 意に對して次にある ・
- 47 47)] l'r t'q-qa yeg ärklig -lär
 ・ ・ 勝根
- 48 48)]köngül-tä öngi qılınçıy []
 ・ ・ 意と異なる業を
- 49 49)] öz-kä övkä-lär köngül[] bilig
 ・ ・ 自らに瞋心・智

- 50 50) ta]vranmaq-ın uyrayı bilgü üçün ärür köngülin []
 ・・精進でまさに知る故に，心を・・である。
- 51 51)]mäk-tä ulatı-ların: bir dw'vy i k' adqanu
 ・・等を・・執
- 52 52)] öglüg-lär [] tudulmıš nom-larıy : nom bilgä
 ・・念もてるものら・・攝した法を，法智
- 53 53)]ky nom-larıy : aqıylıy-ı ärsar yılayu bilig-ning
 ・・法を，有漏は世俗智の
- 54 54)]y ymä ter : bu ikigü-tä öngi töz-i bar ärmäz üçün
 ・・(とも云う)。この二つより他の性の有ることはない故
- 55 55)] adın-lar köngülin bildäci bilig iki orun
 ・・他らの意を知る智は二地
- 56 56)]ynk taqi: bilig : beš orun-tqi köngüllüg ärür selu dyan(?)
 ・・にある智，五地にある意もてるものは靜慮・・である。
- 57 57)]'yk bu yintäm bar qılur yol-nung (twqw') 'w[]wr-l'ryn ymä ök
 ・・此れは唯だ有を爲す道の・・
- 58 58)] bolmaqıy bıšrunyuluq ärür bu ara-sın(?) uqluy
 ・・成熟するところである。この・・理解する
- 59 59)]wq-qa qamay üstün []wq w[] adqanmaq-lıy adqanyu-ları
 ・・諸の上の所縁の境は
- 60 60)] tıltay []
- 61 61)] äd [] anın qaymaq []

SI Kr.1/26

62 1)] aq̣ıysız k[

63 2)] üčün ingülük aqlayuluq(?)

64 3)]syz []m[]lyk yintäm qılur : bu uyur üz-ä []
 ・ ・ 唯爲す。この行相によって ・ ・

65 4) kö]ngültä öngi qılınčıy : kälädük ödki : uyuş-lar-ta tutulm[aq []
 ・ ・ 心不相應行を。未來時の界において繫せられる ・ ・

66 5) köngültä öngi] qılınčıy temiş ärsär : ärür(?) üčün bilig: []bilsär
 ・ ・ 心不相應行を」と云ったのは・智・である故。・色等を知るなら

SI Kr.1/25a (+ SI Kr.1/26 + SI Kr.1/31b)

67 1) öng-tä ulatı-ları[γ 1/26-6)] ärsär anıñ adqanγu-sı ärmäz üčün
 kūsämäz üčün bilgäli

・ ・ はその境ではない故に。知ることを欲しない故に。

68 2) kūsüş bilir bilgä bil[ig]ymä ter : tutulmıš tem 1/26-7) iš ärsär öngüg
 uyur qılmaq üz-ä temin bilär üčün²⁵
 「繫された」と云った：色を行相と爲すことによって乃ち意を知る故に

69 3) köngülin anın bilmäz yeg ärk-lig-ning temiş ärsär tümgä ärklig-lig-lär
 1/26-8) ärsär birmäz-lär yeg ärklig-lig-lär-ning köngülin
 了ぜず。「勝根のもの」と云った：鈍根もてるものらは勝根もてるもの等の心を知らない。

70 4) orun üz-ä temiş ärsär dyan-taqı-lar bilmäz : dyan-ta ulatı-lar-taqı-lar-nıñ
 t[1/26-9)] üz-ä temiş : köngül-tä ulatı

25 kūsüş bilir bilgä bil[ig]ymä ter 「願は智を知る・ともいう」は訂正文である。

「地によって」と云った：禪定にあるものらは禪定等にあるものらが
 ・ ・ によってと云った心等を知らず。

71 5) -larin : adin-lar-nüng yangšaq (l) iŋ-i bu yangča tetir : káz-igi (-inta)
 ter : beš tutyaq ükmäk-ning ti[ltay] 1/26-10) ülüš-lügindäki qayu bar
 餘らの繁雜はこの様という。次第（とも）いう。五取蘊の因分にある
 所有

72 6) -inča : bilig-lär ärsär qilip : mnsiz uyur-ta ävrildäči ämgäk tep : beš
 tutyaq ükmäk-täki tüş 1/31b-1) ülüš-lüg [indä bar aqiy]-süz
智は、非我行相に轉ずるものの苦を作して、と。五取蘊にある果分
 は無漏が有る。

73 7) -lar : uyur üz-ä ävrilmäkin ymä ter : ükmäk ärsär [] uyüş-taqi beš
 tudyag-lar ärür : temiš ärs[är] 1/31b-2) ämgäk kirtuk ad²⁶
 蘊は・行相にある五取である、と云ったのは苦が入る

74 8) -qanyu qilur üçün : bilig temiš ärsär nom-lar: bilig bölüklüg üçün süz
 temiš tuydači 1/31b-3) öčdäči türlüg²⁷
 境を作す故。智と云ったのは法が智品の故。「非」（非常）と云った（の
 は）生滅種の故。

75 9) üçün : sıydači tegüči töz-lüg üçün : temiš : mäninglig körüm-nüng qarşı
 üçün : mänsiz 1/31b-4) ärsär kntü öz mn²⁸
 逼迫性もてる故と云った。我所見の違故。非我は我れ自身で

26 uyur üz-ä ävrilmäkin ymä ter によって 6 行目の qilip : mnsiz uyur-ta ävrildäči ämgäk 「非我行相に轉ずるものの苦を作して」を qilip : mnsiz uyur üz-ä ävrilmäkin ämgäk 「非我行相によって轉ずるものを苦と作して」に修正している。

27 süz (swz)は欠性表示接尾辞である。内容から推して ürlüg-süz 「非常」の-süz 「非」を表現したものと考えられる：作非常苦空非我行相轉名苦智。（『入阿毘達磨論』 p. 985c l. 6）

28 9 ～ 10 行目の内容は次の『阿毘達磨俱舍論』のものと類似する：逼迫性故苦。違我所見故空。違我見故非我（vol. 29 p. 137a l. 9-10）。

76 10) ärmäz üçün : sez-ig bar qayu tükätsär tört uyur-ların adatı atı boltı ymä
ter : 1/31b-5) ämgäk bilgä bilig²⁹

でない故。疑いがある：もし四行相を已えるならその名は[苦智]となる。

77 11) tep : qutruldaçı vayniki-lar-nıng intürgäli üçün tuyuryalı üçün irmäkin
qorqınçın 1/31b-6) munı []³⁰

所化のものが厭怖を生じさせる故に、これを・・

78 12) iki uguş üz-ä oqıyol : tutyaq ükmäk : yumtaru : uyuş-larda bolur qılıı
二類によって誦すべし。取蘊は總じて界において・・となる。

79 13)]yörgälmış tügi täg aqıysız bilgä bilig-lig temiş ärsär : qılıp tıltay blgü
・・くるまれた穀物のごとし。無漏智のと云ったのは因の相・・爲して、

80 14) b]ildäçi temiş ärsär : uruy bo[lmaq] yörtügüg
・・知るものと云ったのは種となる義を・・

SI Kr.1/34

- 1) [] y' [
- 2)]-l'r ärs[är
- 3)]ldtym typ 'lq [
- 4)]'m'k ärtür: t [
- 5)]"s'tmıys ögrät [

29 adatı「名づける」が atı boltı「その名は・・となる」に訂正されている。

30 intürgäli üçün 「墮としめる故」には削除記号が付されているので訳出しなかった。

- 6)] bilmiş üçün [
- 7)] m : ikilâyü bîşrunyuluq-um tep tuymaq
 ・ ・ 更にわが修するところ（ではない）と，無生の行相
- 8) [-sîz uyur] tæg : sözlægüçi nom-lî : bilig bölüklüg
 ・ ・ ごとし。所説の法と，智品
- 9)] p temiş ârsâr : öngtünki : bilig tæg uyur
 ・ ・ と言ったのは：先にある智のごとく ・ ・ 能う
- 10)] yänä bilgülüküm tep ulatî : bilgäli tægimlig
 ・ ・ また，わが知るところと等。應に ・ ・ を知るべし。
- 11)] : anñ iki bilig-lär adrîlur : tuymaq-sîz uyur
 ・ ・ 故に二つの智は異なる。無生の行相
- 12) tuymaq] sîz törülüg-lär-kä ög öritgülük ärür :
 ・ ・ 不生法もてるものらへ念を上らせるべきである。
- 13)] m'q : boşyut-suz-lar nä qilyuluq-in bütürü tükäd
 ・ ・ 無學らは爲すべきところを遍く ・ ・ し已える
- 14)] yincürmäksiz i(s) tämäksiz üçün : bilig yindäm körüm
 ・ ・ 不推度の故に，智は唯見（性に非ず）
- 15)] yumtaru körüm (tözlüg) : ärmäz töz-lüg ärür-lär atın töz-lüg adq[ay?
 ・ ・ （餘の六智は）通して見性，非（見）性である。他の性もてる（縁？）
- 16)] ärür yumyî basaqî : kertü bilgä bilig-lär : bilig-tä tudu[lu-
 ・ ・ である。共に次の諦智は智において攝せられる
- 17)] nynk yumtaru yörüg-lär : bilig yintäm aqyly[γ

- ・ ・ の總義：智は唯の有漏

18)]bölä adıru ata tükädi : öcmäk bilgä bilig yint[äm

- ・ ・ 分別して稱しおえた。滅智は唯だ（無爲縁）

19)]ürlüg üčün (etigsiz-ig atqanur) adqanmaz tači ärmäz ymä ter : ämgäk
t[ergin bilgä bilig³¹

- ・ ・ は常故に、無爲を縁ずるものではない。苦集智

20)]üčün adqanur : bilig-lär-dä ol yılayu bilig-tä [ulatı

- ・ ・ 故に智においてその世俗智など ・ ・ 縁じる。

21) adqandaçı tep : adın-ları či artır-lär [] basaçı bili[g

- ・ ・ 縁ずるものと。他らは智である。 ・ ・ 次の智

22)]ärsär bilip öcmäkig adqantaçı [] ärsar ämgäk-lär [

- ・ ・ 知って滅を縁じるもの ・ は苦

23)] yol-lı kertü-lär : sy[] üčün bilig-lär (yu[mdar]u) či artır s'[

- ・ ・ （滅と）道との諦を（攝する）故に智などは通して智である。

24) ä]rür üčün 'wqw[]wq : öngsüz uyüş amranmaq uyüş [

- ・ ・ である故、 ・ ・ 無色界，欲界

25)]ty üzä anı üčün bilgä bilig tavranaq swz [

- ・ ・ によって，それ故，智，精進は

26) üčün anın []ärmäz orun [

- ・ ・ 故に， ・ ・ 地

31 tači ärmäz ymä ter 「tači ärmäz ともいう」は atqanmaz 「縁じない」を atqn-tači ärmäz 「縁ずるものではない」に修正したものである。

- 27)] barčata öritgäli bolyuluq üçün adın p[
 ・ ・ 全てにおいて起すことができるもの故に、他の
- 28)] bilig-lär ätür : antay yänä adqantačï-sï ärsär 'w[
 ・ ・ 智である。そのようにまた縁ずるものは
- 29)] üstünki uyuş-larda-qıy : öngtün uqıtdı im[
 ・ ・ 上界などに居るものを先に顯した
- 30)] yol-ta nom bilig taplay : yol-ta : otyu[raq
 ・ ・ (苦集滅) 道における法智忍, 道に定んで
- 31)] üstün uguş-taqı : kertü-lärig öngtün ken
 ・ ・ 上界にある, 諦らを前後
- 32)] aş-nu nom ken basaqıy : ämgäk-tä nom bilgä bilig taplay[
 ・ ・ 先の法, 後の次のもの, 苦法智忍
- 33)] w[]z adırtladačï : (-lamaq ymä ter) bilgä bilig tegli³²
 ・ ・ 差別するもの。智という
- 34)] anın atı bolmıš ol taplay tep "'ty"qlıy üçün p'mw'
 ・ ・ それ故その名は忍となると。・ ・ の故
- 35)] m'z (ter) : bilig tep ulatı : uqıtur munta či bilgä
 ・ ・ 智と。及びここで智・ ・ 顯す
- 36)] kykyn bilig üzä : başly(-süz) ödtin bärü yangılıp ymä ol
 ・ ・ 智によって無始時以來迷って, またその

32 -lamaq ymä ter というのは adırtladačï 「差別するもの」を adırt-lamaq 「差別すること」に訂正することを意味する。

- 37)]üçün aqırsız biliglig köz-üg körmätüküg amtı körüp
 ・ ・ 故，無漏智もてる眼を見なかったのを，今見て
- 38)]mys ol taplay-lar-nıng arasında bu säkizägü ärtür nomuy
 ・ ・ その忍の間でこの八つは法を（観察すること）である。
- 39) äd]gü yiltiz-ta bilig ol bilig taplay-ta y[mä] körtür üçün yoq
 ・ ・ 善根における智。その智忍においても見る故，無い
- 40)]t' xui bilig či bilig öz töz-lüg ärmäz : otyuraq
 ・ ・ （これは見および）慧（であって），智の自性もてるものではない。
定んで
- 41)] t'ky taplay-ları amrılmamış üçün : yinçürmək istämişlig köngül
 ・ ・ 忍らは息まなかつた故，推度意樂
- 42) [mängi bil]ig adamaz : töz (-nüng) yörügi : üstün yörmiş
 -täki tetir : y '(?)³³
 ・ ・ 智（と）名付けない。性の義は上で釋したものにあるという。
- 43) ämgäkig körmäk ü]z-ä taryaryuluq eyin yatdači-lar-nıng pirapdi-si birlä
 ・ ・ （苦を見ること）によって斷たれる隨眠得と俱に（滅し）
- 44) tapla]γ-lıy pirapdi-si birlä tuyar : munda ken uqıtur
 ・ ・ 苦法智の忍）はその得と俱に生じる。今後 ・ ・ 顯す
- 45)]'wq : šib bilig-ning ärmäz-in yertinçülüg-tä on
 ・ ・ 十智のものでないことを世間に十

33 傍注挿入の（-nüng）は通常書かれる左傍に空白がないので右傍に書かれている。

- 3) [-lük bilgä bilig-tä ulatı] adqanyu-larıy
慧等の(如く) ・・境を
- 4)] wr üčün 'w[
・・故に
- 5) tuyu]m birläki(-si) tägmä[k
・・生と俱にあるものは得
- 6)] qavıra vayvaš
・・略して毘婆沙を(作すべし)
- 7)]-läär üz-ä bölär atırtla[]
・・分別する
- 8)]r üčün anın söz-lämiš ol q'[]
・・故に説いた。
- 9)]y tägmäki tög bolur bilig ty[]
・・得のごとく智・・となる。
- 10) bil]gä bilig bärgürtdäci köngülüg
・・智を現すものは心もてる
- 11)]w' ögrädinmiš ärsär adın alqu
・・習ったものは餘の一切の
- 12)]t'ky : munta qayu nom-nung tükäl
・・ここで何の法が具に
- 13)] yänä ikigü-si ärsär antay yänä kim(?)
・・更にその二つはそうに又

- 14)]ykwsy bolmıš bolsar kenkisi yarım
・ ・ になったなら，後のものは少分
- 15)] önglög uyuş-ta tutulmışıy
・ ・ 色界において攝せられたものを
- 16)] sanvar ymä ärmäz asanvar ymä ärmäz
・ ・ 律儀でもない不律儀でもない
- 17)]ky bolur bolmaz : sanvar-ır öritmäyür
・ ・ 可，不可。律儀を起こさない
- 18)]syz-t' öngi ketärmıš krgäk : iriyapt
・ ・ 除かねばならない。威儀
- 19)]aşdaçı-nıng iriyaptı artuqraq bışıy beş
・ ・ 増大するものの威儀は極めて成熟した五（？）
- 20) uzan]maq ädräm orun-ın tep temıš ärsär bu oq iriyapt
・ ・ 工巧處をと云ったのは：この威儀
- 21) ö]grätinmıš ärür bu öngi kedägüçi-lär-tä ançulayu kälmiš
・ ・ 習ったものはこの除外においてそのように未来
- 22) ü]čün adın-ları-nıng birlä-ki kenki tägmäki bu
・ ・ 故に，餘のものらの随後の得はこの
- 23)] tuyum ulatı öngtünki öngi kätärgüçi-tä öngi
・ ・ 生及び以前の除外の外に

3. 結び

ロシア所蔵ウイグル語文獻斷片には未だテキスト化されていないものが2千點以上有る。筆者は現在も内容の同定作業を續けているが，なかなか進まない。とりわけ草書體文字で書かれた論書や注釋書は難解で明確な内容解明は容易でない。『入阿毘達磨論』注釋書斷片もそれに屬する。研究が進めばここに提出した内容が修正される可能性はある。

省略記號

Tattv. = ウイグル文阿毘達磨俱舍論實義疏 (庄垣内[2008] pp. 165-745)

引用文献

- Adams, D. Q. [1999]: *A Dictionary of Tocharian B*, Amsterdam-Atlanta,
(Leiden Studies in Indo-European 10).
- Poucha, P. [1955]: *Institutiones Linguae Tocharicae*, Pars 1, Praha.
- 平川彰他[1973, 1977]: 『俱舍論索引』第一部, 第二部.
- 中村元[2001]: 『廣説佛教語大辭典』(上中下) 東京書店.
- 庄垣内正弘[1978]: 「古代ウイグル語」におけるインド來源借用語彙の
導入経路について『アジア・アフリカ言語文化研究』No.15, 東京
外国語大學アジア・アフリカ言語文化研究所 pp. 78-110.
- [2003]: 『ロシア所藏ウイグル語文献の研究』京都大學大学院文學研
究科 (ユーラシア古語文献研究草叢書1).
- [2008]: 『ウイグル文アビダルマ論書の文献學的研究』松香堂.

The Uighur version of commentary on *Abhidharmāvatāra-śāstra* preserved in Russia

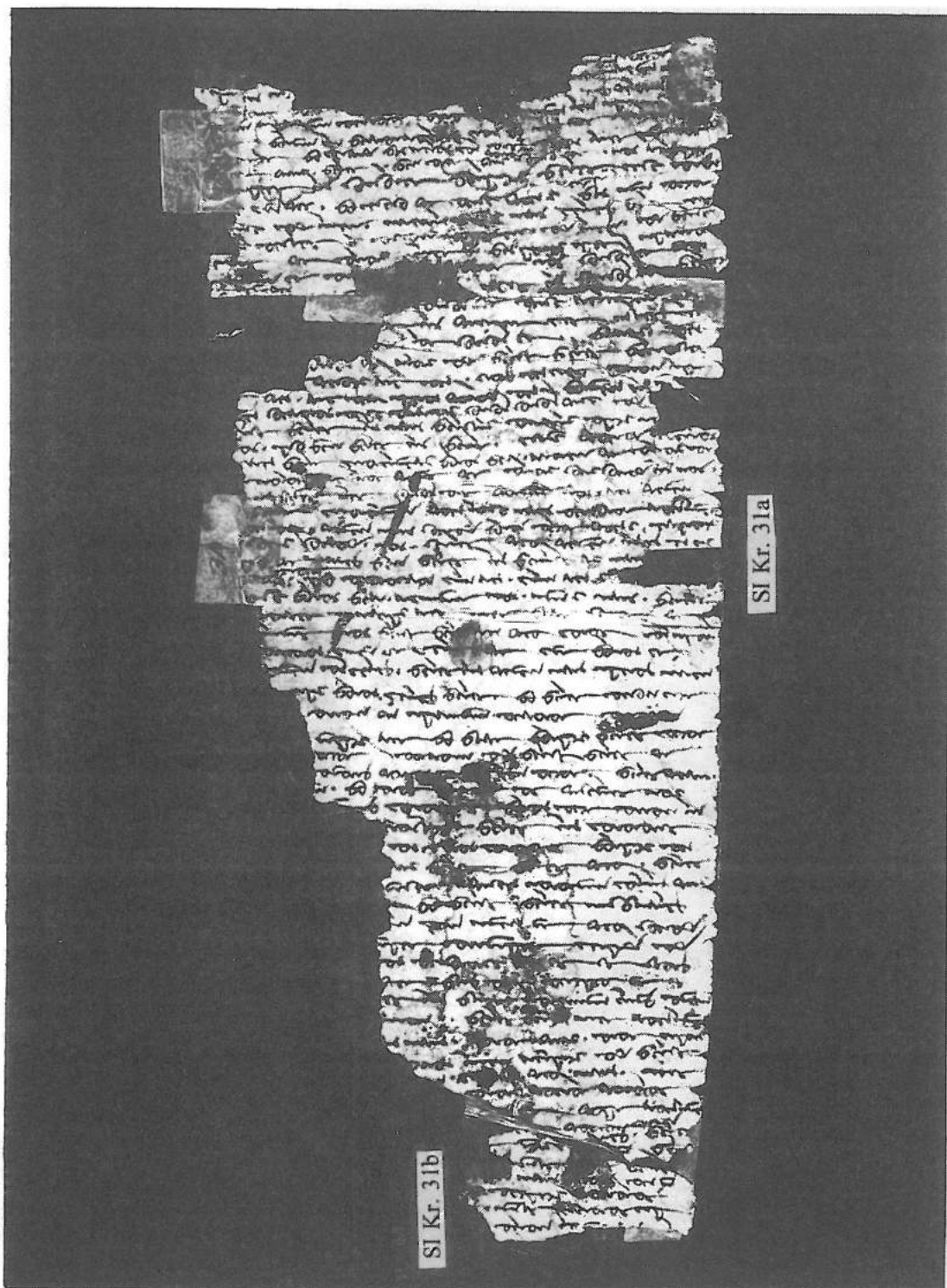
Masahiro Shōgaito
(Kyoto Sangyo University)

In this paper we did research on five Uighur fragments kept at the Institute of Oriental Manuscripts of Russian Academy of Sciences. These fragments (SI Kr. 1/25, SI Kr. 1/32, SI Kr. 1/26, SI Kr. 1/34, SI Kr. 1/31) have been proved to be part of the Uighur version of commentary on *Abhidharmāvatāra-śāstra*. The Chinese version of *Saddharmapuṇḍrika-sūtra* is written on the back side of the fragments. The original locations of these five fragments can be reconstructed based on the contents of the Chinese sutra. As a result, the fragments SI Kr. 25 and SI Kr. 31 are divided into two parts respectively, which are located apart from each other. They seem to have been erroneously restored and numbered in the restoration process at the Institute a long time ago. After reconstructing the original locations of these fragments, we transcribed and translated the Uighur text. We found the contents precede those of the six fragments (SI Kr. 1/24, SI Kr. 1/27, SI Kr. 1/28, SI Kr. 1/29, SI Kr. 1/30, SI Kr. 1/33) which were once discussed in Shōgaito[2003].

A few fragments of the Uighur version of commentary on *Abhidharmāvatāra-śāstra* remaind also at Stockholm Museum of Ethnology. All these fragments in the two places are translated from the Chinese text, but we have never found the original of translation.

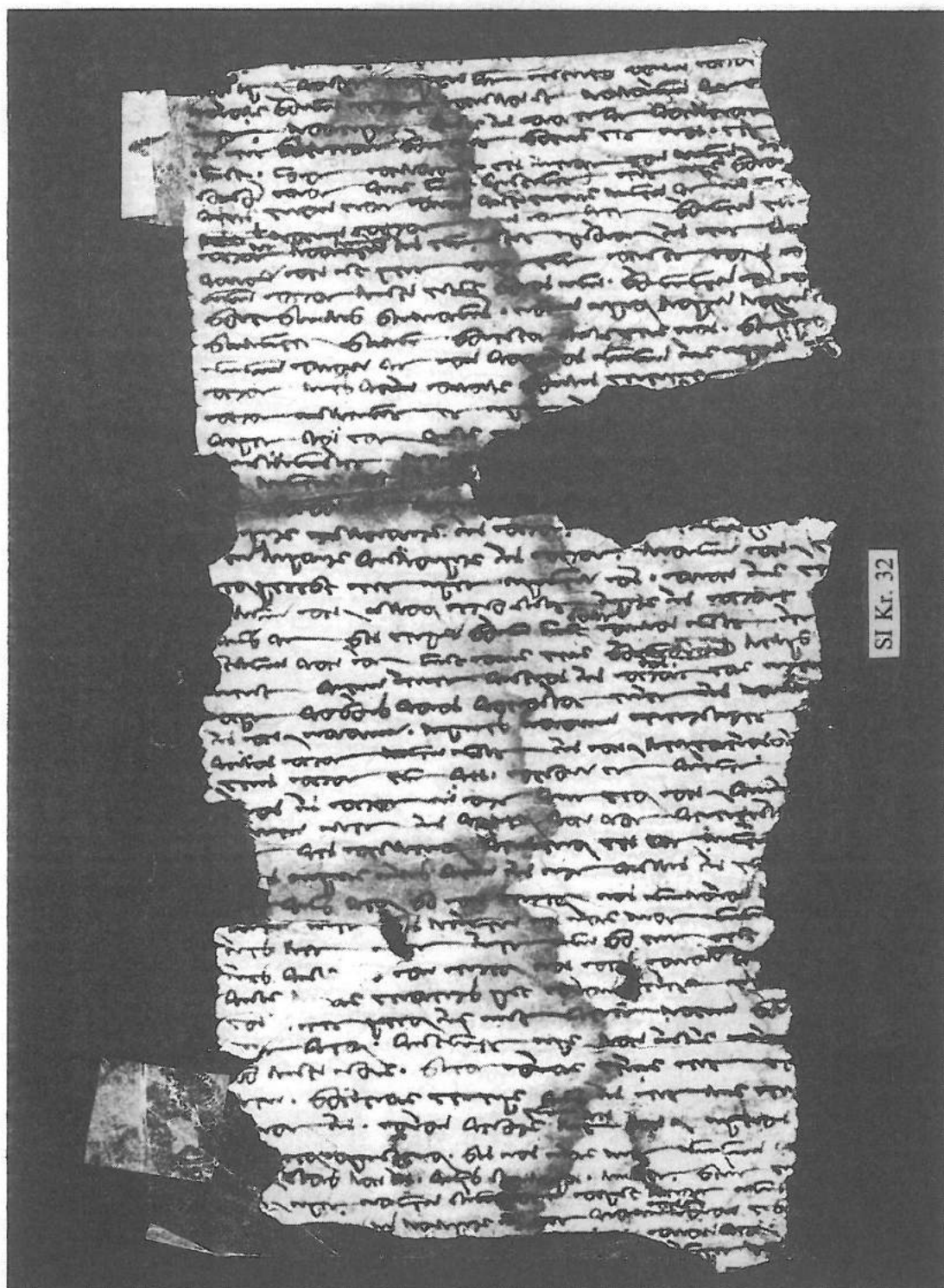


SI Kr. 26



SI Kr. 31a

SI Kr. 31b



SI Kr. 32

